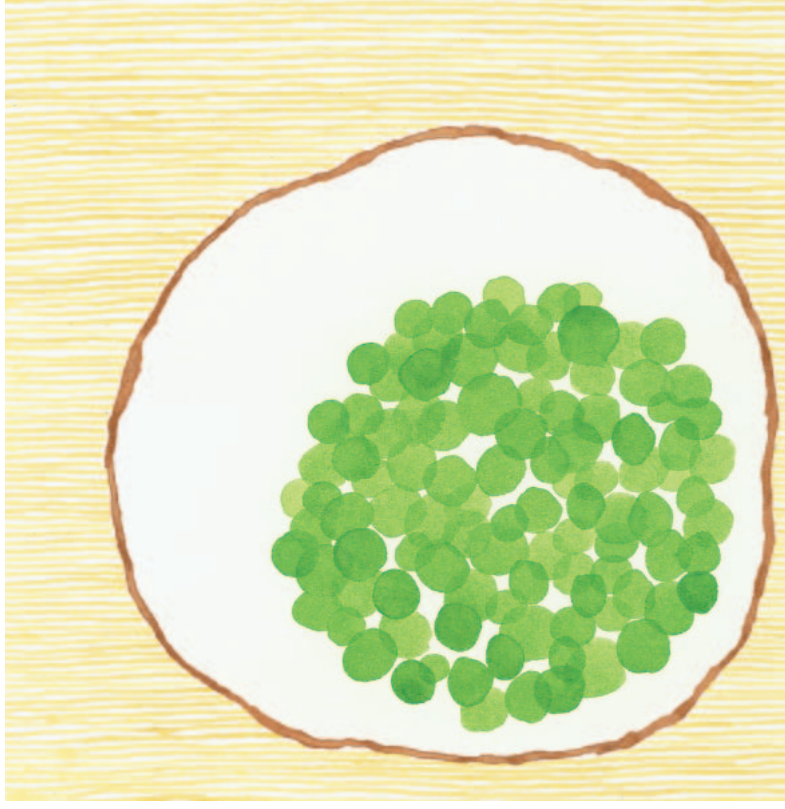


Illust. : Ohtsuka Ichio

▌ Destruction & Creation ▌

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

Inter Feel Design

インターフィール・デザイン

儀式はこころをデザインする

「離婚の原因は何なの？」というやっかいな質問に対して5年間の同棲生活と3年間の結婚生活を終えたばかりの山岡人誌はこう答えた。

「浮気とか、こころのすれちがいとかいろんな原因があるけど、メタなレベルで言うと、やっぱり、セレモニーを軽んじたことが一番の問題かもしれないな」「セレモニー？」「そう。結婚式というセレモニーをうまく使って、神と親類縁者の前で『この女性を妻として生涯ともに生きることを誓います！』って宣誓をしなかったのが自分のいい加減な態度につながったんじゃないかと思うんだよ」と山岡はバーの宿り木でため息をつきながら言った。

彼は長い同棲生活に加え、新婦が再婚であることも手伝って、親しい友人だけに絞った簡単なパーティーを開いただけで結婚式という正式な儀式を省いた。つまり、神にも友人にもきちんとした誓いを立てず、指輪の交換もしなかったことが、彼が結婚という重要な人間関係の契約に対する意識が薄れた原因になっているというのだ。簡単に言うと、結婚という名の人間関係を作るための儀式の欠如が自分は結婚しているという感覚の薄さにつながり、最終的に離婚に至ったというのである。彼が区役所に行って籍を入れた覚えも、外した経験もなかったことから、そのリアリティーの無さはうかがえる。

結婚のみならず私たちの世界にはさまざまな儀式がある。ある部族は若者が大人と認められる一定の年齢になると、バンジージャンプをさせることで恐怖を乗り越えさせ、大人としての覚悟を植えつける。また、蜂のいっぱい詰まった袋に入れ、壮絶な痛みを感じさせることによって大人の厳しさを痛感させる通過儀礼もある。これらの儀式に共通するものは新たな状態を創るために過去や現在の状態を壊すという破壊と創造のデザインである。つまり、社会的責任を課せられるにたる大人の意識を創造するために、これまで彼らが安穏としてきた子どもの意識を強力な至高体験を伴う儀式によって破壊するのだ。儀式とは新たなこころの状態を巧みにデザインするための創造装置なのである。山岡の場合、結婚というデザイン装置の使い方に欠陥があったために過去の自分をうまく経ち切れず、2人の関係がうまく機能しなかった。道具は正しい使い方が必要なようだ。

茶の儀式

ティーセレモニーというぐらいだから日本の茶の湯も何らかのこころのデザイン装置であるに違いない。では一体人のこころをどうデザインしているのだろうか？

お茶のデザインは大きく分けると政治的側面と芸術的側面に分けられる。まずこの装置の政治的機能から見ていこう。茶室が外と区切られる限定された空間であることは言うまでもない。人はこの小さなスペースに寄り合い、濃密なコミュニケーションを楽しむ。その目的の1つはみんなが唇を茶碗の同じところに合わせ、同じお

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

Inter Feel Design

インターフィール・デザイン

茶を飲みまわすことで結社意識を作り出すことにある。つまり、お茶は一緒にお茶を飲んで、「おれたち仲間だよね」と皆で決意し、それを確認するための装置なのだ。茶室で濃茶というドロドロしたお茶をみんなで飲み回すことでそこに参加する人々のこころを1つにし、濃い関係をデザインするという機能を持っている。お茶の儀式は強烈な体験を共有することによって互いの関係性を深めていくように作用するのだ。身近な例として、都会育ちの人は敬遠するむきも多いだろうが、田舎では日常的に行われている杯の飲み回しがある。宴もたけなわになると、みんなが自分の杯を持ち歩き、同じ杯を他の客と飲み回すことによって互いのコミュニケーションを深めていく。こうして見ると、他者と仲間意識を共有するためにこの杯なり茶碗なりといった他者の唇に触れたものを、自分も同じように敏感な唇で触れるという超えなければならない一瞬が、儀式の要素として用意されているのがわかる。他者と自己とを分ける意識の一線を、狭い空間と茶碗の回し飲みによる密接な身体感覚の共有によって超えるようにお茶はデザインされている。

こうした仲間意識のデザイン装置を使って秀吉の時代からさまざまな政治的交渉がなされてきたようだ。そこは堺の商人たちとの鉄砲の売買をはじめとする商売や政治の話が交わされる情報交換とディールの政治的場所であった。政治的側面でもう1つ見逃せない視点は権力の示威である。茶会で使われる茶器をはじめとするさまざまな道具にはその家の趣味の良さや財力が現れる。また、茶会の催される規模や集まる客の質によってその家の力が表れた。逆にいうとその力を示すことのできる装置でもあったのだ。

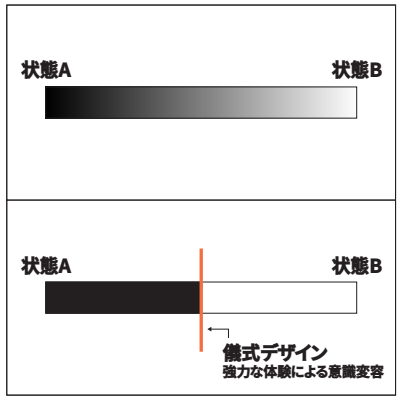
破壊してリセットする

次にお茶の芸術的機能を見てみよう。お茶は大きく3つの空間で構成されている、と自分では勝手に解釈している。客がまず通されるのは待合という破壊のための空間だ。ここであなたは時計や携帯電話といった物質のみならず、仕事や日常の雑念といった浮世の鎧を外すことを求められる。そして準備が整うと、破壊された日常感覚をさらに清めるために体験がデザインされた庭という中間領域にでる。中ほどにある石桶の水で手を清めるためにしゃがみ込むという動作とひんやりとした水の触覚が改めて自分の新鮮な身体感覚を呼び起こすのがわかる。そして、この大自然の神秘を縮小した空間への小さな旅を終えるとついににじり口と呼ばれる、またもや身体を窮屈にすることを強いられる小さな入り口からお茶のミクロな創造宇宙へ突入することになる。

制限と編集から見えるもの

宇宙といってもここはその奥義に気づくように人工的に編集デザインされたインスタレーションスペースである。中にはいるとまず見ることを拒否するかのように薄暗

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D



Inter Feel Design

インターフィール・デザイン

い空間の中に床の間の掛け軸が目に飛び込んでくる。たとえば、そこには200年前にその茶室の持ち主であった歌人の『萩の花……』という歌が墨で書いてある。そして、彼が家の周りを散歩していたら野に一輪まるで今の自分の境遇を象徴するように萩の花がさびしそうに咲いていた、という意味の歌の横に墨絵の萩の花が描かれている。ふと目をそらすとその掛け軸の横に、150年ほど前に作られた花瓶の中に今朝その茶室の近くで採れたという本物の萩の花が一輪さしてある。時代と空間を超えて外からサンプリングされてきた書の萩と絵の萩という2つの萩の記号と本物の萩という3つシンボルのリミックスを見ているうちに頭がくらくらしてくる。そして、耳をすますと火の音と沸騰する鉄瓶から聞こえる変容する水の音が聞こえる。この空間は土、火、水、空気、光といった自然の要素が象徴的に組み合わされてできている。こうした象徴や記号、そして実体を素材にして編集された意味と感覚の宇宙を、人々は研ぎ澄まされた自分の五感をもちいて自らが創造しながら楽しむ。すなわち、日常では気づくことの少ない自然現象の結びつきやパターンを茶室という制限された空間に置きかえることで見ようとするということになる。その狭い空間と茶の儀式を通して人はその外につながる宇宙を夢見ることができるのだ。

今日の結論。

創造のために
破壊する儀式をデザインせよ。

人と人との深い関係や理解を創るためには、まず乗り越えなければならい感情や生理を破壊する強力なセレモニーをデザインすることが重要になる。老婆心ながら、これは私たちの既成概念を取り去るという意味であり、洗脳せよということではない。

Think Favorite!

photo : Nakamura Tohru (mermaid)

七瀬至映 Nanase Yukiteru
クリエイティブディレクター&プロデューサー。情報を受発信する個人が主役となる時代のコミュニケーションの可能性をテーマに、マルチな活動を続ける。近著に『クリアトロン～創造性遺伝子』、インターネット社会の新たな価値創造の方法に迫る『サクセス・バリュー・ワークショップ』(いずれも発行：デジタルハリウッド出版局)がある。
「あなたの情報デザインテクニック投稿大歓迎！」
mailto:yukiteru@creatron.net

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

［インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ］ ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D（株式会社インプレスから分割）が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

http://i.impressRD.jp/bn

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容（技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど）は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者（執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など）が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元（株式会社インプレスR&D）、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D（当時は株式会社インプレス）と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接的および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先
株式会社インプレスR&D
All-in-One INTERNET magazine 編集部
im-info@impress.co.jp

Copyright © 1994-2007 Impress R&D, an Impress Group company. All rights reserved.